

朝野新聞

第千三百五十一号

大坂中有名な元太夫語り豊竹小鞆太夫村
跡七の同所御吳社内の標座へ出勤し打つ
評判より三月廿四午後芝居も別て小鞆の
便所(至り)折現と出る武智光秀(テナリ)
入の男が手拭を面部を包み白刃と推し口頭
の恨と思ひ知れと肩先四五寸切付て倒れ
を左の腕と打落し猶教ヶ所と手と負せ跡
白浪と逃失う此物音の一座人々其場へ欠
付太夫の姿を見るよりも其騒動大さるるに
相手誰と千負小同へ只小鞆と云ひの
終るるう息絶れば其趣を訴ふる右小鞆
徳といふ梶村々云と云て御吳標座の道見方
まを昨年迄勤め居るが去冬小鞆の紀州へ雇れ
一座不残連行しが梶徳のとを残り帰坂の後
前の如く彼者と雇ひられ共紀州行は陰に
根は持て出勤し跡しが夫ホの意恨るる
との風説也梶徳の猶小鞆が生死を問定んと
芝居の床下小潜し居るが終る頭色のいと
難きと知り自殺しと果さるといふ



明治十二年 三月十八日 御届

新虎町三丁目九番地 南傳馬町二丁目二番地
重工山崎徳三郎 出版人 林吉蔵

明治十二年 三月十八日

第二号